

山本七平著「帝王学－貞観政要(じょうがんせいよう)の読み方」日経ビジネス人文庫 2001年刊を読む

「六正・六邪」の人物評価法

魏徴の定義する「六正・六邪」(論撰官第7・第10章)を参照してみよう。

(1)まず「六正」の方から進もう。

①「聖臣」

きざしがまだ動かず、兆候もまだ明確ではないのに、そこに明らかに存亡の危機を見て、それを未然に封じて、主人を超然として尊榮の地位に立たせる。これができれば「聖臣」である。

②「良臣」

とらわれぬ、わだかまりなき心で、善い行いの道に精通し、主人に礼と義を勉めさせ、すぐれた計りごとを進言し、主人の美点をのぼし、欠点を正しく救う。これができれば「良臣」である。

③「忠臣」

朝は早く起き、夜は遅く寝て勤めに精励し、賢者の登用を進めることを怠らず、昔の立派な行いを説いて主人をはげます。これができれば「忠臣」である。

④「智臣」

事の成功・失敗を正確に予知し、早く危険を防いで救い、くいちがいを調整してその原因を除き、禍を転じて福として主人を心配させないようにする。これができれば「智臣」である。

⑤「貞臣」

節度を守り、法を尊重し、高給は辞退し、賜物は人に譲り、生活は節儉を旨とする。これができれば「貞臣」である。

⑥「直臣」

国家が混乱したとき、諛(へつら)わずにあえて峻厳な主人の顔をおかし、面前でその過失を述べて諫める。これができれば「直臣」である。

(2)次に「六邪」をあげる。

①「見臣」

官職に安住して高給をむさぼるだけで、公務に精励せず世俗に無批判に順応し、ただ周囲の情勢をうかがっている。これが「見臣」である。

②「諛(ゆ)臣」

主人のいうことにはみな結構なことですといい、その行いはすべてご立派ですといい、秘かに主人の好きなことを突きとめてこれをすすめ、見るもの聞くものすべてよい気持ちにさせ、やたら迎合して主人と共に楽しんで後害を考えない。これが「諛(ゆ)臣」である。

③「姦(かん)臣」

本心は陰険邪悪なのに外面は小心で謹厳、口が上手で一見温和、善者や賢者をねたみ嫌い、自分が推挙したい者は長所を誇張して短所を隠し、失脚させたいと思う者は短所を誇張して長所を隠し、賞罰が当たらず、命令が実行されないようにしてしまう。これが「姦(かん)臣」で

ある。

④「讒(ざん)臣」

その知恵は自分の非をごまかすに十分であり、その弁舌は自分の主張を通すに十分であり、家の中では骨肉を離間させ、朝廷ではもめごとをつくり出す。これが「讒(ざん)臣」である。

⑤「賊(ぞく)臣」

権勢を思うがままにし、自分の都合のよいように基準を定め、自分中心の派閥をつくって自分を富ませ、勝手に主人の命を曲げ、それによって自分の地位や名誉を高める。これが「賊(ぞく)臣」である。

⑥「亡国の臣」

佞邪をもって主人にへつらい、主人を不義に陥れ、仲間同士(どうし)でぐるになって主人の目をくらまし、黑白を一緒(いっしょ)にし、是非の区別をなくし、主人の悪を国中に広め、四方の国々まで聞こえさせる。これが「亡国の臣」である。

(P.97 ~ 99)

— 2008年3月31日記 —